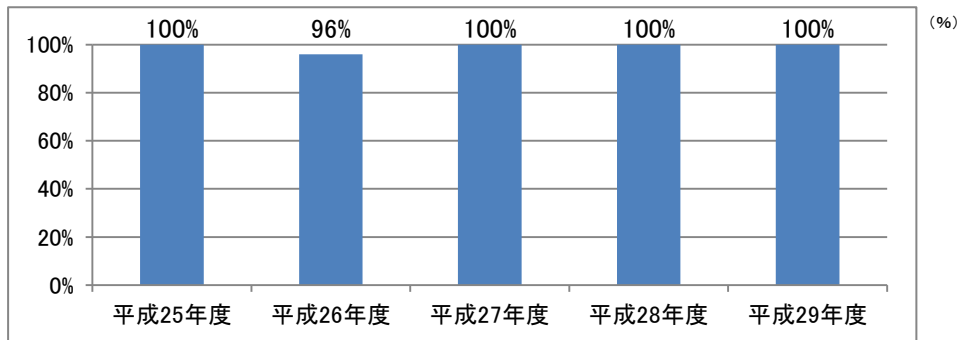


10 急性心筋梗塞患者における入院当日もしくは翌日のアスピリン投与率

○項目の解説

急性心筋梗塞の治療は、血管カテーテルの技術と材料の開発が進み、侵襲の大きな外科治療から、患者の負担が少ないカテーテル手術へと変遷してきました。しかし再び心筋梗塞を起こさないための予防は必要です。予防薬としてはアスピリンという血を固まりにくくする作用を持つ薬が有効で、この薬の投与は急性心筋梗塞の予後を改善させるため、標準的な治療の一つとされています。急性心筋梗塞でどのくらい標準的な診療が行われているかを表現する指標といえます。

○当院の実績



○当院の自己点検評価

当院では、急性心筋梗塞の早期再灌流を目指し、緊急の経皮的冠動脈インターベンション治療を行う全症例に対してアスピリンを投与しています。また急性期に保存的治療で経過観察した症例に対しても、二次予防として禁忌がない限り全例アスピリンの投与を行っています。平成26年は左室自由壁破裂の緊急手術後、持続性出血のためアスピリンを含む抗血栓薬の使用が禁忌となる症例が1例存在したため、入院翌日までのアスピリン投与率は96%(24例/25例)でした。しかし、平成27年度以降は、全例入院翌日までのアスピリン投与がなされ100%の実施率です。平成30年度も同様に、禁忌症例を除いた全例に対して当日もしくは翌日にアスピリンを投与開始しており、安全性に留意しながら標準的な診療を着実に実施しています。

○定義

急性心筋梗塞患者における入院当日もしくは翌日のアスピリン投与率(%)です。

○算式

分子: 入院翌日までにアスピリンが投与された患者数

分母: 最も医療資源を投入した病名が急性心筋梗塞の患者で、且つ緊急入院した患者数(再梗塞を含む)